

元気 いっぱい!

殖生中学校 環境整美係

学校中、あふれんばかりの花でいっぱいの殖生中学校。来校者の目を楽しませる素敵な演出を陰で支えているのが環境整美係のみなさんです。植え替えや手入れ、水やりなど、一つひとつの花に愛情をいっぱい注ぎ、丹精こめて育てています。

取材に訪れた日は、サルビア、マリーゴールド、ダリアの植え替えの作業中でした。「同じ種類の花でも一つひとつ色も違うし、咲き方も違うのですよ。今日植えた苗がどんなきれいな花を咲かせるのか楽しみです。」と話してくれたのは1年生の松川満みちるくん。きれいに苗の植え付けが終わった花壇を見つめる横顔は、競い合うように咲いている、色とりどりの花々の様子を思い描いているようでした。夏の太陽と環境整美係みんなの想いをいっぱいに浴びた花が満開を迎えるのは9月。その時には、環境整美係みんなの顔に”笑顔の花”も咲いていることでしょう。



▲手で掘った穴に、一苗ずつ丁寧に植えていきます。



▲土の上に藁を敷き詰めます。水の蒸発を防ぎ、花がしっかり水を吸収するための工夫です。

－ “男だったらそれくらい” “女だったらそれくらい” ふと感じる “それ” の疑問。－ 本市では、「女ひとと男ひとの一行詩」と題して男女共同参画社会の実現に向け、その想いを詠んだ一行詩を毎年募集しています。第8回目を迎えた今年も、全国から2,652点もの作品が寄せられましたが、多くの力作の中から、みごと特別賞に輝いたのが上記の高木千穂さんの作品です。

市内でただひとりの入賞者でもある高木さんは、地元サビエル高校に通う高校生。学校で一行詩募集のポスターを見かけて応募を思い立ったとのことですが、愛犬の散歩をしながら考えた作品が予期せぬ？好評を博したと驚いたようです。「入賞なんて思いもしなかったから、うれしいです。」と笑顔で受賞の喜びを語ってくれました。「男女共同参画とかそういう大げさなものではないんですけど、『女の子ひとなんだからこれくらいしなさい』とか言われると『女の子ひとなんだからは余計でしょ！』って思うこともあるんですよ。」と話す高木さん。何気ない言葉の中に感じた “疑問” をさらりと詠んだ詩が共感を呼びました。

中学生時代から市内全域の子供会行事をサポートするジュニアリーダーとして、ボランティア活動にも積極的に参加してきた高木さんですが、将来は看護師として社会に貢献できればと夢を膨らませています。次代を担う若者のためにも、男女を問わずその力を存分に発揮できる、そんな豊かな社会を目指したいですね。



これからの「ひと女のあり方」
考えてみませんか



ひとと ひとの一行詩」特別賞を受賞した

たかぎ ちほ
高木 千穂さん

(サビエル高校2年)